

暁台の初号は悟一か

清水孝之

(昭和三十九年二月一日受理)

一 研究史大概

石田元季氏の「暮雨巷暁台」(『俳文学考』(『俳文学』)による)、伊藤東吉氏と志田義秀氏とが、期せずして暁台の前号へ他朗について実証されたことにふれ、

また別に、暁台の前号を悟一と称したといふ、なほ考究を続けた。悟一は彼の名の五一(また、呉一・呉市)と音相通ずるもの。悟一の句は夜話亭の撰集『三秋句合』(『甫の春』)等に見える。

と附記された。志田義秀博士の「俳人の初号」(『昭和十二年九月号』(『国語と国文学』)を見ると、『暁台句集』の

一度他郎、我名その他郎とつく。今法師身まかりけると京にありて聞、句を尾の連衆に送る。是をもて一回忌の俳諧をなす。

我名ひとつ枯て露けし瓜の蔓(暮雨巷句集)になし。

を根拠として、宝暦四一六年の朗詠三集に出る藤他朗を加藤氏他朗と推定された。しかし宝暦四年二十三歳の「他朗以前に初号がなかったとは保し難い」と慎重に断定を控えられたことに注目される。

伊藤東吉氏も「ひむろ」(昭和十二年八月号)に「暁台の前々号」を發表された(見末)。

今「暁台年譜」(昭和十六年三月「国語」(『国文学研究』)第三輯)によると、他朗号の初出は宝暦二年一月序、其麦編『七化集』所収の一句であり、それに基づいて、他朗は宝暦元年、反番舎巴雀に入門か、と推定され、また翌二年六月の巴雀急逝後その嗣子夜話亭白尼の指導を受けた(『水芙蓉』(参照)ものとされた。へ他朗V号は、宝暦八年の禹麦編『花のめぐみ』(三月)・巴雀七回忌集『水芙蓉』(六月)の序(十一月)・明之坊編『巻通し』(半常庵序)の三撰集にまで現われ、翌十年刊其節坊子礼編『伊良胡崎』(九月)以後へ買夜V号が使用され、宝暦十三年十月執筆の蛙啼集(明和元年刊)序に至って、みずから「尾藩の隠士暮雨巷暁台」を称し、(合)暁(子)買夜の二印を押捺した。なお明和元年刊巴雀十三回忌集『蟬時雨』及び明和五年刊『姑射文庫』(人)にへ買夜V号がみられるが、例外的使用とすべきであろう。

以上のように、暁台の前々号へ他朗Vに関しては、完全に解決済みであるが、へ悟一Vについては、いかがであろうか。

故伊藤東吉氏は労作「暁台年譜」を残されたのみで、敗戦直後の企画である俳文学双刊に予定された同氏の暁台伝は、遂に成稿されることがなく終わったらしい。「暁台年譜」によると、享保十七(一七)年の項に、

○九月朔日、尾張に生る(暁台)句集(注二)『安良馬声所』に「暮雨巷暁台のをちか本居はおのれと同じ知多なる内海の久村なりけり。しかはあれと甘とせに三ツ余りし世のふる人になもあれは(注三)えしをしにもあらねと、……」(清水が引用)と

いふ。父岸上林右衛門、母加藤氏か、幼名仲八。

とあるのみで、五一(また、呉市)に關しては何らの記述もない。石田氏も「本姓を岸上と云ったが、後加藤氏を冒して平兵衛と称し、尾藩の小吏であった。」と記され、宝曆九年三月江戸で脱藩後、「表向国住居の許されなかった」ため、「その間に久村姓を名乗り出したものであらう。」(暮雨巷)と推測された以外、姓名について深く触れておられない。「力草」(岡田梅間 著、稿本)によると、初め加藤平八、後養父の初名を襲って平兵衛と称し、後には「桑名町一丁目東側久村呉」と通称して、偶居前津に龍門を建。」と伝える。

久村呉一が脱藩後の通称であることは、ほぼ確かであろう。寛政八年刊其成編『蕉門中興俳諧六家集』の六子略伝にも「姓久村、名周挙。」とする。

鬼頭素朗・伊藤亮三共編『尾張俳人考』(昭和十五年十一月刊)には「名周挙、通称平兵衛」の他に、号として白一居をもあげ、高木蒼梧氏の『俳諧人名辞典』(昭和三十五年六月明治書院刊)では、「名は周挙、また呉(後)一。」とされ、白一居・亭一庵等の別号をも列挙するが、△悟一▽初号説に關しては、何らの記述も見えぬことは、山下一海氏の「加藤暁台」(明治書院版「俳句講座3」)に至っても同様である。伊藤東吉氏の執筆にかかわる『俳諧大辞典』(昭和三十三年七月明治書院刊)の「暁台」の項に、

名は周挙。字は後一。通称、平兵衛。別号、買夜、暮雨巷、龍門。

とあり、字を△後一▽と認められたことに注目される。「俳歴は

当初、美濃風の反喬舎巴雀(宝曆二年没)・夜話亭白尼父子に師事。その初号他朗の句は、宝曆二年の其麦編『七化集』入集のものが最も早い。」として、△他朗▽初号説に固定された。一方、同辞典の市橋鐸氏執筆の『三秋句合』の項には、暁台の初号「悟一」で入集、と記されていて、名古屋の暁台研究家の間にも定説がないようである。

注一 『尾張俳人考』の武藤白尼の項には、著書として、『五甫の春』が記載されている。昭和十一年刊『藤園堂俳書目録』には見えない。注二 刊記なし。暁台門大雀の弟子、一樹庵楚山編、文化末年刊。『綿屋文庫連歌俳諧書目録』は文化十二年刊と推定。暁台二十三回忌とすれば、文化十一年の編集か。

二 寛延以前における悟一

残念ながら、私は右の「字後一」の根拠を再調査し得ないでいるが、晩年の伊藤氏が△悟一▽初号説を否認されたことは明白である。思うに、石田氏が「暮雨巷暁台」なる画期的な論文に附言された初号に關する部分は、「暁台の伝歴出自に關して」「多年墳墓を尋ね過去帳を探り、旧縁を暁台の家の有せりと認められるところへは、煩を辞せずして往訪し、今日に於て知り得る限りを調査し、更にその家藏豊富の書に併せ考へられた結果は、近く某誌上に掲載せられることになってゐる。」と推輓された伊東氏の研究から由来したものと推察される。今となつては、晩年の伊藤氏が△悟一▽を否定されるに至つた経緯を知るべくもないから、私は私の道をたどるより他ない。

昭和三七・三八兩年にわたる私の調査(主として藤園堂蔵書による)では、悟

一の初出は、寛延元年刊『三秋句合』を遡ること五年、寛保三年巴雀歳旦に他ならぬ。即ち次の歳旦三つ物である。

ほうらいの寢覚や富士の夢合 青玉子 悟 一

秋の匂ひのみのる福藁

花鳥の市はとちらも賑ひて

寛保二年の忘年会を主催した主人菊兎は「今宵百笠下の年忘はおさな心の若ウ人もあれば、琴棋書画の理屈をやめて、謎かけて遊はんとなり。……」(宴年忘(之席))と記し、会する者、千箱(斎(百鶴)・蘇文(宰也)・百三・李説(井(花花)・笠度(藤連(舎)・亀六(蓬萊(下)・野仙・流東(下(百橋)・百兎・梅二・路十(菊南(子)に次いで、

したり顔なる物は何

懸乞や草鞋解する旅戻

恵方棚釣て大工のたはこかな

大きにてよき物は何

鬼のない御代の便りや丹後鯉

巨 川 (一花) 悟 一 杉 更 (馬山)

の順で並ぶ。計十五人のうち、百三・亀六・流東・悟一・杉更の五人は、次の蘇文・菊兎・左鹿(子(麦蝶))以下十二吟の短歌行には加わっていない。また本歳旦帳の巻軸に位する反喬舎一派の短歌行(五条坊)には、菊兎・蘇文の両名以外は一座しない。

遡って元文六年(寛保元年)の名古屋度世堂(五条坊)歳旦には、悟一は入集せず、また五条坊の元文四年度歳旦(入集)・元文三年度歳旦(夜話主人菊兎と)にもその姿を見出し得ない。因みに菊兎は、享保九年(十六)五条坊歳旦(さび)に入集、享保十八年度(歳(二五)に

は羽衣館 菊兎を称した。

寛保三年度のものが巴雀(五八)の初めての歳旦ではなく、既に早く正徳六年(享保元年)歳旦(庫目録)が存した。従って元文末

——寛保初年の悟一も現われぬとは断じ得ないが、青玉子 悟一は菊兎のいわゆる「おさな心の若ウ人」らしく思われる。悟一こそは菊兎に随従する年少の弟子であつたとすれば、両者の師弟関係はそう多くの年を遡り得ないであろう。

寛保三年十月、五条坊は芭蕉五十回忌を記念して、大曾根成就院に三日月塚を築き、記念集『秋の昔』上下二冊を刊行した。

「有とある喻にも似す三日の月」を立句とする五条坊・反喬舎以下の七十二行には、四十句目に悟一の短句も見えるのみならず、表六句の四つめは、

其桜もみちに散て小春かな

悟 一

人目も草もかれ時なれば

五条 房

世を捨てた嘘に山居も飽か来て

菊 兎

使もてなす昆布にせんし茶

左 長

九日の近さに月もつほみ顔

令 五

夢のにしきに衣の水張

百 雉 (上巻)

である。他に二巻の表六句(共に脇・第三は)にも悟一は参加している。また次の三句も入集する。

ちり残るにしきの骨や梅もとき

(冬之部)

山吹や日うらへ廻る水の色

(春之部)

畑糞の側に瘦たる野菊哉

(秋之部)

これ以後、大部分の悟一の句が歳旦歳暮吟であるのだから、『秋の昔』にみえる三句は珍重に値する。出来栄えは、型通り美濃派風の理窟にわたる所産であり、幼稚な観察や小主観に他ならない。「山吹や」の一句、感覚的作風かともみえるが、実は山吹が水に映っていて、日蔭の水面にも、山吹そのものの金色が恰かも太陽のように輝いている、という理窟の域を出ないであろう。

子の寝入ころやきはめて鉢叩

菊 兎

飛梅や接木の智恵も此目より

〃

夕くれの火宅をにけて紙帳哉

〃

としの瀬も半は立けり天の川

〃

少年悟一よりも、師菊兎のほうが、語辞の扱い、意想の複雑さにおいて優るといえようが、その句作法は概して同類同型であると断じ得る。なお下巻の表六句は、竹郎・五条房・米布・菊兎・白尼・執筆であり、白尼号の早期の例として注目されるのみならず、後の悟一・他朗問題を解く一つの鍵にもなるであろう。

巴雀もまた芭蕉五十回忌集として『七塚そなたの空』を編集・刊行した。

茶のはなや赤元山の片そはへ

悟 一

の一句が入集するが、巻軸の恵方庵における反喬舎社中の二十四節には一座しない。

その後、延享二年の不之庵

坊(五条) 歳旦には悟一を見ないが、同年の反喬舎巴雀歳旦には入集する。即ち自在庵連中・四方観連中

等について、夜話亭連中の三つ物十二のうち、其三・其六・其七に悟一の姿を見出す。其三は、

鶯も年玉配るはつ音かな

悟 一

軒の見込も高き梅か香

李 川

破魔弓に子共の分限光らせて
である。

路 十

人日和詩には白尼子菊兎とあるが、例の「終年詞」は奉行白尼子とのみ署名され、句頭に「ひ」の字を入れて「火渡しの興に遊ぶ」という。

広蓋に大振袖や衣くはり

路 十

絵物屋に恵方棚ありとしの内

悟 一

以下総計十五人である。夜話亭短歌行は、百居巢千箱・蘇文・菊兎・左長・笠都・李川・悟一・柳塘・杉更・紀六・路十・令五の十三人。むろん次の反喬舎月次連中には菊兎以外は参加しないことは、彼らが初期夜話亭の親衛隊を形成していたことを意味する。

反喬舎の歳旦は寛保三年が三二丁(十二行、以下同じ)、延享二年が四二丁、延享四年が五六丁というふうに、紙数と共に参加人員も増加してゆく。菊兎・白尼が併用される延享四年巴雀歳旦には、どうしたわけか、夜話亭連中に悟一の姿を見ない。悟一を曉台の初号とすれば、延享三年十月二十六日、養父・野方山方奉行加藤仲右衛門(初、平)が没した(「力草」による)から、その服忌の故であろうか。

延享五年(寛延)の巴雀歳旦(五十)にも、不之庵木兎の歳旦にも、われわれは悟一を発見しない。同年二月二三日には、十七歳の加藤平兵衛(初、平八)は藩主に新規御目見えをした(「力草」)。

寛延元年には、夜話亭白尼編『三秋句合』が刊行された。処女出版らしい。十六丁表に至って、七つの三つ物(十、千箱・李川・

左蝶・紀六・）が収められ、其二・其四・其七に一座し、其七は
 悟一の順序。

菊つくり腰を延して月見かな

悟 一

の発句である。また各詠には、李川・左蝶・路十・悟一・紀六・
 蘇文・亡人 百雉の順で、各四句が掲げられた。

滝の音のひゝきに散るや糸さくら

悟 一

うくひすも老けり竹の奥はいり

同 同

野、錦引わけ行や駒むかへ

同 同

けさはまた人も通らす橋の霜

同 同

この連中は、巻頭の立鶴短歌行（本見・白尼・米布・普夕・竹）、中

秋首尾之吟（野有・白尼・楚市・）および晩秋短歌行（反喬舎・白尼・

二吟・）に参加しない点からも、比較的若輩らしい位置を示してい

るようだ。そのうち千箱は享保十八年五条坊三逕蔵旦や同十九年

刊巴静編『俳諧木之本』に入集する相当な年輩の俳人であつた

が、「われ夜話亭の日に筆をとる事とし久し」（寛延三年）とい

い、早くから夜話亭の執筆役をつとめた人物である。また右の三

つ物連中は、延享五（寛延）年木見蔵旦には、悟一と 亡人 百雉以外

の六人が参加している。

「各詠」に次いで位する楊花園短歌行は、路十の発句に白尼・

蘇文・李川と並ぶが、悟一は加わっていない。そのあと、夜白林

短歌行（其麦・）、汐花亭短歌行（白鬼・）・菊里下連中の首尾之吟

（木糸・）・葉々下連の歌仙表（馬六・）等が続く。

下巻は諸国之部であり、美濃派の五竹坊門の諸吟も最後に収め

られてはいるが、前年（延享）夏の白尼・柳几同行の奥羽行脚にお

ける武蔵・駿河・陸奥等の風交諸家の吟をも含めて、当時著名な

伊勢派俳人の顔ぶれがみられることに注目される。松嶺庵 柳居

（享保末年）・百川・義仲寺 雲裡坊を始め、勢州神都之部には

義上園 兎士・麦浪・幾曉庵（雲）・二日坊等が勢揃いしており、

その他金沢の希因や大和萩野の古山も洩れていない。

京町筋の紙屋七兵衛こと武藤巴雀は、乙由・涼菟・木因に批点

を乞うたらしいが、彼らと特別の師資関係は認められず、早く元

禄十六年刊東鷺編『おのれが家』に十八歳の巴雀の句が入集する

から、最初の師は貞門の巨靈堂東鷺であろうという。また五条坊

木見とは特に親しく、露川・知足・支考らとも風交した。東鷺門

下として乙由にも近づき、相当の俳名を得た後に獅子門に帰した

のであろう、ともされる（『俳文学考説』）。従って巴雀は少くとも

支考一辺倒ではなかったようだ。

享保十一年獅子房（支）の序を得て『本朝八僊集』を刊行した彭

百川は、翌年には早くも「昇角（百）事其後は兎角かけろふ稲妻に

ていつこにありとも定かた、何やらあしき沙汰聞え申候。：

」（三月四日附表上）と、支考をして嘆かせている。それは美濃派

に叛旗をひるがえし、伊勢派に接近した行動に関するものと推測

される。とすれば、尾張俳壇における反美濃派運動の先駆であろ

う。後の涼袋を希因・梅路らに紹介して、伊勢風を鼓吹したの

は、他ならぬ百川であった。

中興期への過渡期において、尾張俳壇の大きな勢力をなした巴

雀・白尼父子の、美濃派左派Ⅱ伊勢派的傾向の中から、眺台のよ

うな次期の復古革新派が育成されるのは、然るべき必然性を持

つ。御三家筆頭・尾張徳川家の城下町における武士や富裕町人層

をバックとする俳壇と、地方農村を地盤とする閉鎖的な純粹美濃派とは、おのずから文化的基盤を異にするはずである。玉屋町住珠数屋・藤屋市郎左衛門こと月空庵露川(寛保三年没)は、名古屋の士人上流から多くの尊敬と尚慕とを持たなかったが、それは彼が市井賣家の人であつたからではなく、性格的原因によるものかと思われる。石田元季氏は「博綜広汎の腹笥を微辞諧言に托する古典的茶人的好尚が士人上流の間に遍蔓して、露川の作風を物足りなく思つたからである。」(『俳文学考読』四一九頁)とされた。巴雀・木兎共に上層町人出身であり、特に巴雀が組織した門下の重要な組連は概ね藩士層であつたと推測されるほどである。従つて白尼が父の名代として出かけた奥羽行脚により、狭い美濃派の世界を脱却して、開放的な伊勢派的視野に立つことができ、それを画期として独立したことは、俳壇史的にも極めて意義深いものが存するといえよう。

延享四年夏、白尼は木曾路を経て鴻巣の柳凡を訪れた。二人同行の奥羽行脚の記念集が、即ち寛延二年刊『二笈集』(延享四年)である。仙台ではまず五明庵旧山(師旧室は江戸における)に迎えられ、丈芝(のち晩台門)とも唱和した白尼は、松島一見の後仙台に静養、柳凡のみが出羽地方の獅子門に歓迎されて三山から象潟へと巡覧した。旅行中の交遊は概して美濃派末流と考えられるが、旧山のような他派とも交換している。「世にいふ名代のみにはあらず。かの獅子の巖頭より落して爰に風雅のちからをためさむとなり。」(巴雀)と、父が期待した廻国修業の目的は推察に難くなく、それなりの成果をあげ得たものと思う。鴻巣に帰着した柳凡

は、文字摺の短冊を土産として柳居のもとに届け、また白尼・柳凡は一世宗瑞門至芳を江戸に尋ねた。「諸国集韻」の夏の部の首尾のみは美濃派の五竹坊「有琴を据えたが、春の部は尾張五条坊同巴雀、秋の部は伊勢麦浪、尾張丁牧、冬の部は加賀希因、越中麻父であつて、概して伊勢派系統の重視が歴然と認められる。秋の部の終りのほうに、蘇文・路十・李川・悟一(『秋の昔』もどきの)・其雪・子礼・米布等の顔が並ぶ。四季混雜の部には、寸長・年路等、江戸美濃派も混るが、宗瑞(世)を始め、馬光・鳥醉・秋瓜・門瑟らの、伊勢派や、『続五色墨』(寛延四年成)派系統の俳人が入集している。とにかく奥羽旅行以後に相ついで編集された夜話亭独立の二集には、親伊勢派的傾向が著しい現象として認められる。

次に夜話亭白尼の最初の歳旦帳かと思われる『寛延二 己巳 悟一が入集する。即ち「人日」第一の三つ物は、野有・白尼・木兎(其)、芦丈・白尼・反喬舎(其)、其推・白尼・米布(三)といった長老クラスの顔ぶれで飾られる。次の「人日」第二の三つ物の発句は、路十・蘇文・李川・紀六・左蝶・悟一の順である。

其 六

鶴も江に下りて祝ふや薺の日 悟 一
杖曳きなから詩のうたひ初 白 尼
老の春聲かくれたる蚕着て 路 十
この三つ物六つの顔ぶれは、寛保・延享年間の夜話亭連中を主軸とし、前年の『三秋句合』から固定している。しかも次の「けふ

の佳節は此庵に遊びて」と前書する仙魯・白尼・野秋の三つ物以下十二とは、はっきり区別ができる。そうして右のグループの配列順から考えると、悟一はやはり最少年であったかと思われ、楊花園路十も、既に延享二年五条坊歳旦の「子日首尾」に一座し
ていて、先輩俳人であつたらしい。また紀六（寛保三年巴雀歳旦の号であ）は即ち堀田六林（寛政三年没八二歳、二）であり、この年四十歳。悟一が晩台の初号とすれば、実に二二歳の年長であつた。
また紫隠里（有）・仏狂子（尼）・藤似水の八日の仮名詩七言三首のあと、「余興」として木兎・白尼・野有の三つ物が坐り、その次の「歳暮短歌行、題閑居」にも紀六・白尼・左蝶・以足・李川・路十・蘇文・悟一と八吟の末席に列している。
また同じ寛延二年反喬舎巴雀歳旦には、僅かに路十・蘇文・李川・紀六・左蝶・悟一（「ほうらいや庭は俵の山つゝき」）の年旦の発句が挿入されているのみで、反喬舎月次連中の短歌行には、右の六人は参加していない。これも彼らが白尼の親衛隊に属したことを明証し、寛延二年の夜話亭歳旦が処女歳旦帳であつたらしいことをも傍証する。

翌寛延三年になると、悟一は反喬舎の歳旦に姿を見せず、夜話亭の『寛延三庚午歳旦』にのみ入集する。即ち人日三つ物の順序は、楚巾・先二・伯葉・也有らの長老組について、前年と全く同じ顔ぶれである。

摘手さへからけぬ雪のわかな哉
年男より老の朝起
歳開き北国船も来合せて
悟一
夜話
路十（其四）

また燕亭（蘇文の亭号か）に催された八吟短歌行の連衆も前年度と変化はない（ただし左蝶は左兆と改号）。今、悟一の附句のみ拾うと、
いつ見ても只若い人なり
ウ 六斎の市もふたつは朝の月
悟一
古寺の春を蛙の啼へらし
詩は作らねと唐卓の佗
悟一
すゝきも乱飽て穂に出る
ニウ 細脰の河内通ひに秋も暮れ
紀六
前年度の歳暮短歌行に比べると、若い悟一の和漢の古典的教養と精進ぶりが歴然と窺われ、その間の修業と進歩のさまも認められよう。

寛延四（宝暦元）年の巴雀・白尼の歳旦帳は未発見であるが、「市中に隠者の店をはりて三十余年、その算盤ははちかねとも、ころの慾は日々につる」と前書きする木兎のこの年の不之庵歳旦には、悟一の姿が現れる。巻頭の元旦三つ物は、米布・路十・紀六・悟一・左兆・蘇文・青羅・李川・竹郎の九人が、この順序に発句を詠み、路十ら六人の夜話亭常連が優遇されている。巻軸の短歌行（その）は、

雪あられ花にいそくや年の坂
を立句に、木兎・蘇文・紀六・李川・路十・米布・左兆の八吟であつて、不之庵月次短歌行（三人はこれに一座）に對比して客分的待遇に他ならない。特に悟一の秀才ぶりに注目されよう。

悟一

前年二月四日、曉台の実父・岸上林右衛門が没した(洞仙寺過去帳「年譜」によ)。にも拘らず、悟一が右の不之庵歳旦に入集するのは、それだけ悟一の俳諧執心が高じたものであろうか。

夜話亭連中は、寛保三年から延享二年に至る間と、寛延年間白尼の撰集における顔ぶれとでは、多少の異動を生じた。寛保三年(一七)と寛延二年(四九)の両年を比較すると、執筆千箱の他は、蘇文・亀六(紀)・路十・悟一の四人が残るに過ぎない。むろん白尼は、享保初年菊兎の頃から、「家父と五条坊三逕(不之庵)との指授の下に精進した」(『俳文学考説』四四九頁)のだから、年少気鋭の悟一こそは、寛保二年三四歳の菊兎のほとんど唯一の新弟子であったと考えてよい。他の三人のうち紀六が悟一よりも二二歳も年長だから、路十が最も接近していたとしても十歳近く上であったであろうか。夜話亭は父の反喬舎を継承するわけだから、当初無理をして新しい門弟を集める必要はなかったのである。極めて自然な人間関係の中で、夜話亭親衛隊の世代的選択がなされたものと思われる。そのうち悟一のみは特殊な例外とすべきであろう。

なお寛延三年には「秋八月、知雨亭野有四十九齡書」と奥書のある巴雀(六五)・木兒(六二)・野有三吟十二表並びに余興の長歌行が野有によって主催されたように(『校訂註釈鶴衣』三三四頁参照)、巴雀・木兒兩宗匠の關係は極めて親密であった。延享五年木兒歳旦の短歌行には反喬舎の発句、寛延三年巴雀歳旦の月次連中一順短歌行には木兒の発句というのが恒例であり、巴雀没後の宝暦四年以後の白尼歳旦には、月次連中の歌仙行の発句は木兒に他ならない。

注一 馬山子杉更には、享保十七年刊『色紙屏風』の編がある。反喬舎巴雀序、莊来子跋。名古屋竹馬子板。

注二 「……さ、波や栗津の古墳はもとより、都越路のくま迄も、名にあるに当季を結ひて、句に七題の員もみてめ。こなたの空ははるけくとも、手向の心まめやかなる、其まことより時雨そめて、頃は神無月の二日の事にそ有ける」とも有る序にある。芭蕉塚前南松本、発句墳武州深川、月見塚尾州大須、仮名碑洛東鼓林寺、三日月塚尾大會根、翁墳越中井波、千鳥墳尾州笠等の七塚である。巻軸の反喬舎連中廿四節の連衆は、巴雀・試中・五条坊・風子・不二・五夕・千箱・東鸞・其雪・普夕・十阿・蘇文・路十・素柱・里応・何力・菊兎・梅宜・糾吾・兎岫・近交・傘下・阿文・以足。

注三 『新編尾藩諸法度』(寛政一、文政期、『名古屋双書』第二巻による。)の御改正服忌令によると、
一、父 母 忌五十日 服三十日
二、養父母 忌三十日 服百五十日、閉月をかぞえず。

注四 「解釈」八卷五・六号所載、前田利治氏稿「建部綾足論」に引用された部分的紹介による。

注五 悟一・以足以外は延享五年木兒歳旦の子日首尾、及び歳暮短歌行にも参加。

注六 京町住、御目見町人、御糸屋彦六。この退隱は享保初年になる。

注七 『俳文学考説』四二三頁によると、享保六年。父巴雀が宝暦二年六月没したが、白尼は同三年歳旦を刊行した。

三 宝暦二一四年の悟一と他朗

―竹母連と鳥州舎連(望日連中)―

宝暦二年になると、夜白林其表編『七化集』天地之部(十四)に悟一、鳥獸之部(六句)に他朗の各一句がのる。

雪霜を初花にして小春哉 悟 一
をし鳥や波間くを縫合せ 他 朗

即ち八他朗V号の初出だが、支麦垂流の小主観で自然を解釈しようとした小細工は全く同巧である。

宝曆元・二年の巴雀・白尼の歳旦は知られない。宝曆三年白尼歳旦の最初に位する「年旦」三つ物^(其六)は、竹母連中の路十・悟一・紀六・左兆・李川・蘇文の六人で、其二是悟一の発句（鳥帽子着て釣はうは気や若夷）に蘇文・紀六とつぐ。この顔ぶれは寛延二・三年のそれと同一。従って従来のグループに新たに竹母（会）連中なる名称がつけられたのだ。竹母が新しい竹の子を生む母胎としての期待であろうか。竹母連中について、桑雨・似水・以足・近交・普夕・青里・子礼・知雀・不二・十阿の反喬舎連中の「元旦」三つ物十が位する。二年六月に没した巴雀の遺弟連である。次いで踏青連中の「青旦」三つ物九が並ぶ。竹摩・關止亭・青可・夜笛改・鹿尼・芦三・銀史・和水・兎狂・乙二・松羽の連衆である。

一方、鳥州舎連中即ち其雪・去角・露狂・双之・他朗五名の歳朝・守歳の発句各二及び同人達の二節十句表^(去角)一が収められている。歳暮も竹母連中五人（悟一の発句は「組板に市は立けり年用意」）について、踏青連中、反喬舎連中の順序で並ぶ。終りの短歌行は、翠五園 李川の発句に蓮阿坊^(白)の脇、悟一の第三以下竹母連中以外には、「感老」の歳暮吟一句を反喬舎連中の最後に録した子礼が加わるのみ。巻軸の月次連中の歌仙行は、木兎の発句に白尼・竹郎・子礼・米布らの順で去角・双之について二十七句目に他朗が一座する。

宝曆二年刊『癸酉桃節』は、紙数五枚の夜話亭春興小冊である。これにも

たなはたの女夫にはなし難かさり 他朗
踏て見る泥や汐干の貝ひろひ 悟一
と入集するが、両句は着想に類似点が認められよう。

翌宝曆四年白尼歳旦^(原題簽『三』元夜話亭)においても、竹母連中の「元旦」三つ物九が巻頭を占め、曾文^(蘇文の改号)・悟一（「其うへに年も重ねて着衣始」）・茶谷・李青・紀六・鶴里・李川・左兆・路十の九人であり、傍線を附した三人の新顔が加わっている。次の反喬舎連中は、前年度のメンバーから十阿を除いた九人。次の踏青舎連中には前年の青可が見えず、新たに巴人が加わる九人である。次の鶏旦・年尾各三の附合は、新たに土来^(前年度は踏青舎連中土来として三才羅)・有耕^(前年度は紫蓮才羅)・才羅^(前年度は悪才羅)・才羅^(紫蓮才羅)・有耕^(中として三元・歳末の三つ物各)の三人が四節庵連中を結成しているのに注目される。有耕は『三秋句合』の立秋短歌行に参加し、延享四年・寛延二年巴雀歳旦、寛延三年白尼歳旦にも入集し、彼らは必ずしも新人ではなく、巴雀没後の夜話亭一門に組連再編成の機運が活潑化してきた現象とみられる。そうして

聖 節	鳥州舎連中
佐保 姫	
華と明てさほ姫もけさ紅粉の緋	三省観 他 朗
山 ひめ	
山姫の出店や戦くかさり齒朶	連低楼 双 之
龍田 姫	
龍田姫はしらぬ染地やきそ始	万古亭 去 角

遠山ひめ

月も日も遠山ひめやはつ曆

柳阿亭 其

雪

について、「守歳」の四句がつがえられる。

月

旦其兄

月は朝へのこりくゝて年の暮

万古主

暮其弟

月雪のあと石摺や除夜の闇

柳阿主

花

紅其兄

隠れなし蘭生に植て除夜の梅

漣低主

白其弟

餅花や暮は打タねと姉か君

三省主

三省親主他朗は、やはり双之よりも若く最年少らしい。二三歳の他朗がその堂号を三省親と称したとすれば、儒教的内省の真摯さを窺うに足るであろうか。前年の鳥州舎連中から露狂一人が脱落している。次の人日十句表は、

文房に佗ける日、佗を名乗ってさそふ友あり、言葉佗たり、我又佗て、杖に笠に袴の窮屈をわすれて、けふの野あ

そひこそおもしろけれ

七草の草摘雪間くかな

其雪

の発句に、蓮阿・双之・他朗・去角の連衆である。右の前書によれば、鳥州舎連中の四人はすべて藩士と推測される。

歳暮吟は、米布・竹郎以下の長老クラス十五人、反喬舎連中の不二・桑雨・近交・青里・知雀・以足・普夕・子礼の八人、次いで踏青舎連中兎狂以下九人。次の竹母連中は、

娘の手に春待宵や花かつほ

良夜園 悟一

を始め、鶴一 李川・一步園

紀六・白羽仙

曾文・百喜園

李青・桂洞舎

鶴里・白梅下

茶谷・李下園

左兆とそれぞれ別号が肩書された。終りの短歌行は、楊花園

路十の発句に蓮阿の脇、第三以下は竹

母連中の八人である。月次連中の歌仙行は、木児の発句に白尼の脇、十一句目に他朗V号で一座している。他朗は即ち太郎であ

ろうが、同一人物とすれば悟一の「一」の変形ではなからうか。

宝曆四年不之庵歳旦における元旦三つ物は、李川・路十・悟一

(「其うへに年もかさねて着衣始」)・左兆・曾文・紀六・米布

・竹郎の八人であるから、むろん竹母連中の名称は使用されな

い。名古屋歳暮は也有以下四人、そのうち

生食は先へといて年の岸

悟一

の句は、去角とは離れ、紀六・李川・左兆・路十と接続して位置する。月次連中の短歌行においても同断である。木児歳旦に新号へ他朗Vが入集しないことは、他朗が夜話亭と深い関係にあることを推測せしめるに足る。

同じ宝曆四年には、夜話亭編『春興朗詠集』(閏二月)が刊行

された。集中の藤他朗の和詩二篇は、曉台の和詩としては現在知

られる最も早期の作品である。また他朗・悟一の各二句も入集する。

美しいものは瘦るやむめのはな

悟一

表具屋に飯の世もあり涅槃像

他朗

鶯になる杖はたのますつき木哉

他朗

参る人も白髪祝ふや仏生会

悟一

作者名を隠せば、両者が別人でなければならぬ理由を説くことは

難い。特に涅槃像と仏生会の句は同巧異曲であろう。しかもこの悟一と他朗は巻軸の「求韻短歌行」(断つてない)にも併出する。即ち 竹母会連中 路十の発句に蓮阿の脇、第三以下は曾文・佐兆・李川・紀六・悟一・巴人(宝曆四年歳旦では踏青舎連中、宝曆六年歳旦には見えない)、次は「望日連中」と肩書があつて土来・有耕・才羅・去角・子礼・他朗と並び、次は「高節連中」の四人、「踏青連中」松羽ら六人がその顔ぶれである。ここに一つの撰集の中の一つの連句に、悟一と他朗とが同席しているかにみえる事実を、どう解釈すべきであるか。

反喬舎の遺産を継承した夜話亭は、当然白尼と同年輩以下の門下グループの再編成とやがて細分化現象が起る。そうしてまた時勢に即応した新しい動勢や職業的な専門宗匠としての独立分化なども、避け得られないであろう。そのような観点からスムーズに悟一・他朗同一人説を理解できぬものか。子礼老人を除けば、右の望日連中は鳥州舎連中の改称に他ならないのだ。同一連句中に別号を使った例は、師白尼に先例が存した。即ち寛保二年反喬舎歳旦における巻軸の短歌行に……以足・仏狂・菊兔・阿文……と並ぶのを始め、同年の『秋の昔』下巻の表六句(菊兔・白尼)や寛延三年白尼歳旦の人目三つ物(米布・夜話・仏狂子)等をあげ得る。悟一が従来の夜話亭親衛隊中の悟一とは別に、新しいグループ鳥州舎・望日連中において新号へ他朗Vを称したとしても決して不可思議ではあるまい。作風の点からも別人である必然性は認められないのだから、白尼が愛弟子に許した殊遇の現われと解してもよいのではないか。

注一 『尾張俳人考』によると、其妻は支考門。他に宝曆三年刊、普東・

傘下と共編『三夕暮』、宝曆四年刊『東山墨直』がある。また宝曆七年刊、追善集『もとの雪』によると、同六年五月、四十幾歳かで没した。五条坊・蓮阿房・普東(宝曆十二年没)・杜十・義仲寺雲裡房らの悼句が入集するが、傍流俳人である。因みに、巴雀歳旦によって判明した門下の年齢をあげておく。桐之坊七五歳、阿文六〇歳、不二は僧(以上、延享五年度)桑雨は寛延二年歳旦によると六〇歳。

注三 寛政八年刊、残雪坊才羅編『続赤鳥帽子』は、同年秋逸筆坊没後、反喬舎二世の名跡をついだ記念集。

四 宝曆五十八年の他朗

—蓬萊下連と尾明丘連—

宝曆五年の『俳諧続朗詠集』には他朗の発句四、和詩二、同六年の『続後朗詠集』には他朗の発句一、和詩一が入集するが、共に悟一の姿は消え、再び出現しそうもない。続集の巻軸の「長歌行 老人一唱」は、去角(句)・蓮阿・子礼・他朗・有耕・松羽……

路十・鶴里(句)の顔ぶれである。続後集の「歌仙行 一人一唱」は

野有(句)・蓮阿・不之庵・子礼・去角・兔狂・有耕・芦有・他朗・双之・禹麦……路十・紀六・佐兆・一泉・梅裡・以足・曾文・執筆で終る。共に竹母連とか望日連の名称は、集中に使用されていないが、去角・他朗らのグループが重視されているようだ。

以上のように、宝曆二年の『七化集』以後、竹母会に属する悟一と鳥州舎連中(望日連)の他朗とが併出するのは、宝曆四年度までの現象に過ぎない。望日連中とは、宝曆四年歳旦における四節庵連中の土来・才羅・有耕の三人が、宝曆三・四年歳旦における鳥州舎連中の去角・他朗に結合した新しいグループであり、こ

れは後の宝暦五・六年歳旦に現われる蓬萊下連中とほぼ同じ顔ぶれである。即ち宝暦五年歳旦における三つ物の順序は、反喬舎連中・踏青舎連中(乙二・松羽ら八人)について蓬萊下連中となる。才羅・鳥麦・去角・其節坊(子礼)・土来・松羽・他朗(「礼者にも魁ありて華の兄」)・有耕の八人が夜話亭の中核的組連として活躍する。同じく月次連中に属するが、竹母連中の曾文・紀六・李青・鶴里・茶谷はB級の地位を保つに過ぎないかに見える。

宝暦六年夜話亭歳旦の三つ物は、竹母亭連中(紀六・曾文・佐兆十・鶴里)・反喬舎連中・蓬萊下連中(他朗・朔吾・有耕・鳥麦)・踏青舎連中・深井舎連中・高節下連中等九つの組連が競いたつ。歳暮では反喬舎・蓬萊下・踏青舎・竹母の順になり、短歌行は蓬萊下連と竹母連の二巻が月次連中のそれと共に、夜話亭一門の俳風振興に併立する(五年度は年尾の短歌。行は蓬萊下連のみ。)

宝暦三年歳旦に出現した竹母連中は、三年度の六人から四年度の九人に増加、共に巻頭に優遇されてきたが、五年度には新しい蓬萊下連中の優勢に押えられ、六年度に至って、両グループが併立した観を呈したのである。

宝暦三・四年の白尼歳旦における他朗の所属は、鳥州舎連中であったが、宝暦五・六年の場合は蓬萊下連中に属した。『朗詠集』における竹母会の悟一が、続・続後二集及び宝暦五年以後の歳旦に姿を消した理由が、物故のせいであつたとすれば、夜話亭白尼は一言の悼辞を記すか、少くとも何らかの表記があつて然るべきだ。既におよそ二十年來の地元名古屋における直属の愛弟子であつたことを想起すれば、等閑に附すべき事件では絶対にあり

得ない。例えば寛延元年の『三秋句合』において悟一と同じグループに属した亡百雉の句は、七回忌に相当するかと思われる『春興朗詠集』にさえ、「二三日かけ出されけり猫の恋 亡百雉」と入集する。従つて宝暦四・五年の間に悟一が死亡したと想定する余地はほとんどあり得ない。

さて、宝暦八年刊巴雀七回忌集『水芙蓉』上巻における竹母亭の短歌行にも悟一は再生しない。むしろ四方観・汐花亭・菊里下・踏青舎・高節下等のいづれにも悟一を見出すことはできない。同年の白尼歳旦には竹母連中の名称は使用されないが、巻頭を占める中核グループであつた。宝暦十一年歳旦に再現する竹母亭連中も曾文・鶴里・茶谷・以兆・紀六の五人にすぎない。この歳旦の末尾に亡命中の買夜の、臘月廿三日附白尼宛書簡が収載されたのである。『曉台年譜』宝暦八年の項に、

○巴雀七回忌集『水芙蓉』(序六月)に前記挽詞、三回忌の句の外、「師の影や七とせさつて苔清水 他朗」を立句とする尾

明丘連の短歌行一を収む。尾明丘連とは鈴去角(當時三十二歳)・河

禹麦(三十歳)・広迂耕・高土来・藤他朗(二十歳)等にして、何れも巴雀・白尼二代の門を通じての中堅俳弟なりしものゝ如し

(一字姓は「朗詠集」によって清。水が補う。迂耕は有耕の改号。)

とある。右の「挽詞」とは『水芙蓉』下巻に、蓮阿坊自身の追善・一周忌・三回忌の句に続いて出るもので、「いかなれや反喬師今年辛未の夏水無月廿日……」と始まるから、宝暦二年六月當時の挽詞に他ならない。署名は「尾明丘連」とのみあつて、去角以下「年譜」記載の順に追善句が並ぶ。三回忌の句は土来・去角・他朗・禹麦(鳥麦の改号。)・迂耕と順序を変えて出し、次に

夜話亭主は亡師の嗣子にして、元より風雅は一鉢也。されは師の生前進も、学ふに水波の隔なく、其道理を習ひて向上の一路に遊ぶ事年あり。滅後は猶も其門に帰して、反喬師の遺訓を守り、蓮阿師の教誡を聞て、虚実の交を謀り、老後の用意怠らずして、今將追善の撰場に臨みて師恩を鼓か事にそなりぬ。

丘主

を引として他朗立句の五吟七回忌短歌行が坐る。そのあとに他朗を除く四人の七回忌追善句及び名録各四句が掲げられた。

右の一文は七回忌に際して記されたことは歴然としており、文休も「挽詞」と同一人のものとすべく、年若くして白尼の鐘愛を受けた買夜の作とは決して考えられない。二十七歳の他朗が「老後の用意怠らずして」などというのはおかしいし、悟一（他朗とす）れば、反喬舎滅後夜話亭主に帰属したのではなかった。宝暦七年江戸詰に転じた他朗は、この七回忌そのものには参列できなかったから、七回忌追善句及び名録句を欠いたものと推定しなければならない。丘主は私の推測では鈴去角である。

既に巴龍舎禹麦には、宝暦八年三月序『華のめぐみ』の編集があった。即ち立机記念集である。集中「在江戸」の肩書で他朗の二句及び在江戸連中（李充・他朗）の八句表が入集する。聖廟御忌歌仙表五を催した尾明丘連は、去角・子礼・青布・迂耕・土来の五人であり、巴龍舎の文台開きは宝暦七年であった（宝暦八年によ）。従って八年白尼歳旦には、尾明丘連に続いて巴龍舎連二十数名が入集し、かつ歳暮長歌行について、木兎・蓮阿・禹麦の「年内立春」三つ物一がすわるという特別待遇である。

先師巴雀七回忌の前年に禹麦は独立し、以後夜話亭の支店とし

て発展するのだから、もし禹麦が尾明丘連の「丘主」であったならば、当然早急に解散さるべきであろう。

巴古亭去角の初出は、管見では延享四・五年の反喬舎歳旦における四方観連中で、月次連中の短歌行にも一座する。寛延二・三年の白尼歳旦にみえず、巴雀歳旦に菊里下連中として現われ、共に月次連中の短歌行に一座しない。延享五年理然歳旦、寛延四（宝暦）年不之庵歳旦にも入集するが、むろん月次連中ではない。

従って去角は巴雀門と考えられ、前掲の文章の作者にふさわしい。禹麦よりも年下ではあるが、「歳末／今年新に巴龍舎に文台をひらき、連士を催して予は其奉行をなせしに、月に日に新連の枝葉しけりて、今や年わすれの雅連を夜話亭に借り儲けて虚実の尽せぬあそひ成けり。」と前書した、去角・禹麦・土来の三つ物（宝暦八年）によれば、巴龍舎の文台開きに去角は友人として重要な役割を果たした。宝暦十年刊『伊良胡崎』にも「子礼老人」の為に跋文を物したのみならず、明和元年刊、巴雀十三回忌集『蟬時雨』にも序（去角）「陀南」二印を捺すを草している。同集に「反喬先師、扇面に句を書して予に給はりしそのむかしをおもひ出れは、誠に今も在スがごとく又夢のことし／扇とはいはつたりよけふわかれの日／（乾闥闥）去角」ともあるように、巴雀・白尼二代一門の有力作家であり、宝暦期に入り頭角を現わした。明和三年春の『小さいさかひ』にも南陀の号で序を書き、また暁台の撰集にも『蛙啼集』（明和元）に南陀で、『姑射文庫』（明和五）・『別しをり菰』（明和七）に去角で入集する。それらは宝暦年間他朗一買夜との親交の度合いと夜話亭一門における地位とを推察せしめるに足るであろう。そのような実力者で藩士らしい去角こそ、尾明

丘連の丘主にふさわしいと考えられる。

この尾明丘連の顔ぶれは、『春興即詠集』の望日連中から、中子礼と藤才羅の二人を除いたのみであり、宝曆八年白尼歳旦に至ると、子礼・才羅も加わり、他に仙魯・蛙丘・青布の新顔もみえて九人になり、他朗は江戸木端舎連中を指導するのである。「望日」と「明丘」とは同質の命名であり、丘主及び連中の志向も窺われようというものだ。従ってそれは、宝曆三・四年の鳥州舎連中、宝曆五・六年の蓬萊下連中を中心とするグループの転進的改称であつたことがたどられる。

なお他朗脱藩の年と推定される宝曆九年白尼歳旦には、他朗の姿は見えないが、尾明丘連は、李充・才羅・去角・其節坊^(子礼)・迂耕・布逸・蛙丘・宇木の八人であり、傍線の新顔三人は、前年の在江戸木端舎連中に他ならぬから、他朗が指導した木端舎は即ち尾明丘連の出店であつたものと考えられ、彼らは他朗と同じく江戸詰尾張藩士に相違ない。子礼は『伊良胡崎』中の也有の一文によれば、二十年前に退隠した武士であつた。去角の出身が明らかにできぬが、このグループも、多分禹麦を除けば、概して藩士層であつたものと推測される。

宝曆十年白尼歳旦の尾明丘連もまた前年と同じ顔ぶれであるが、翌十一年歳旦になると、尾明丘連は解散されたらしく、姿を消してしまふ。巴龍舎禹麦^(子礼)の独立に続き、藤他朗は脱藩し、二人の職業俳人を生み出すことで、丘主・鈴去角は満足しなければならぬまい。この両家こそは夜話亭から現れた保守と革新の二大勢力をなすものであり、尾張俳壇転換期の曙光を示す事件であろう。そのような母胎的役割を果たしたかにみえる丘主を曉台とする旧説

は、訂正されなければならない。

以上のように、宝曆二年一月序『七化集』から同四年閏二月序『春興朗詠集』に至る間、悟一と他朗とが同一俳書中に併出したが、異別の俳書中に別々に現われる例は、発見できない現状である。そうして、宝曆五年夜話亭歳旦、巴雀編・白尼補『草錦』^(宝曆五年半掃庵序)以後は、白尼門悟一の姿はかき消えてしまふ。これだけは確かな事実である。ただし管見に入つたところでは、今後次のような異例を見出す。

第一は宝曆八年仲冬上旬の半掃庵^(有也)序を持つ明之坊編『巻通し』に、

抱籠や脊中に腹はかえられす
ゆく秋や夜るになりてもはかとらす
他 朗

の二句と共に、巻末の「四季混雑」十五句中に、
華時は覺てさくらやわすれ草
悟 一

の一句が見出される。「抱籠や」と「華時は」の二句などは全く同一手法であろう。「四季混雑」は他に佐兆^(句)・紀六^(句)・鶴里・李青・李川^(句)・曾文^(句)・李説・朝宇・茶谷・路十の十人であり、この十人は四之巻園城寺入御に参加の連衆であつた。彼らは宝曆四年白尼歳旦における竹母連中に朝宇一人を加えた顔ぶれに他ならぬから、その頃の集録を附載したものと考えて大過あるまい。編者明之坊は同集中に暮之坊の別号をも用い、尾三中心の行脚俳諧僧らしく、本書の編集は長期間にわたつたものであろう。従って『巻通し』の場合は、宝曆五年以後に悟一が他朗と同時に出現した証拠とはなし難いであろう。

第二例は、「宝曆辛巳中夏日」蓮阿房序するところの稿本「子礼翁追善集」(編白尼)である。「文通之部」の最後、洛陽八幡僧以

足の悼句の次に、「子礼翁身まかりしとそ。異郷にこの計を聞て……」と長文の感慨を述べた

あはれ世や柳のしつく松の露

買夜

の一句が入集するのみならず、也有の「悼子礼引」を持つ追悼歌仙にも末尾に名を列ねている。また本集の附録としての「四季詠混雑」六一句中に、

陽炎にもへたつ色や木瓜の花

悟一

があり、文通之部の最初に、

浮みたる雲やこはれて白牡丹

買夜

が、やはり肩書なしに出る。

右の四季詠中の「悟一」は、例えば

美しいものは瘦るやむめの花

悟一

(宝曆四年、朗詠集)

などとは雲泥の差が存し、悟一作風とは直接結びつかぬほどである。また他朗の佳作、

おくり火や砂のはたれかあしの跡

他朗

(宝曆五年、続朗詠集)

年の夜や髪結床に草履の数

他朗

(宝曆六年、白尼歳旦)

等よりも、感覚的作風は一步前進しているかにみえる。しかも陽炎の一句を「買夜」の白牡丹の句と比較すれば、上下逆方向ではあるが、全く同想とみてよからう。

鶯の眼も水にすはるや秋の暮

買夜

(宝曆十年、伊良胡崎)

濁り江の空にしむ夜や春の月

買夜

(同前)

もまた同様な上下逆方向的視覚運動を、前年刊行された子礼の編集集中に示したものに他ならない。多分「子礼翁追善集」の中の悟一と買夜の両句は、この頃の彼の新しい手法を端的に示すものであって、多分この「悟一」作品は旧作ではあるまい。買夜自身が懐旧的に旧号を使ったのでなければ、従来の悟一・他朗併出の事情を熟知している編集者白尼のさかしらであり、それは文通之部にも肩書はすされねばならなかった買夜の一身上の都合とも関連する処置であらう。

第三の例はずっと後年に現われる竹母連の悟一であって、最も解釈に困難である。即ち反喬舎巴雀翁三十三回忌「百蓮会」(明天四年六月一句并桂裏序、蓮阿坊白尼編、上巻のみ藤園堂蔵)に、踏背舎連松羽以下十一人、一句并連桂裏以下十六人等十四の組連の九番目に、素間・李仙・悟一・佐兆の四人の竹母連が現われる。素間はかつての蘇文||曾文の改号と考えられ、李仙は李川、佐兆は左兆と同一人であらうから、この四人はまさしく宝曆初年の竹母連中に属した。私の悟一||晚台初号説が正しいとすれば、天明二年は五一歳にあたる。四人の内二人まで老境的改号を示しているにも拘らず、悟一のみが寛保三||宝曆四年間の旧号のままで現われるのも、いささか疑問を提起させるものがある。しかし

三十三とせ池やめぐりて蓮の花

悟一

は、明らかにこの年の「捻香」時点の句に他ならない。

鶯もはいかいも音を入れにけり

他朗

夏桃をけふ三年の手向かな

”

師の影や七とせさつて苔清水

他 朗

(以上、宝曆八年、水芙蓉)

夏萩に置あへぬ露のたまむかへ

〃 (明和元年、蟬時雨)

の、旧時の悼句に比べて遙かに見劣りがするのは追善句の通弊かもしれない。のみならず附録四季の句中、夏・秋の部に「悟一」作品二句が入集する。

高柄杓の人にはたらく清水哉

竹母連 素 聞

包れはみやけにしたき清水哉

佐 兆

ひねる間は蚊にくわれたる団哉

悟 一

× ×

秋のさひまた研立て秋の月

竹母連 悟 一

恋の外子に啼くもあり明の鹿

佐 兆

無事室は手代ともいはし今日の菊

李 仙

これでは全く旧時の

雪霜を初花にして小春哉

悟 一

(宝曆二年、七化集)

烏帽子着て釣はうは氣や若夷

悟 一

(宝曆三年、白尼歳旦)

等の作風・作域に逆行するものだ。

私はこの現象を次のように解したい。集中には曉台の義兄狙乃の拙い「手向」の一句も見られる。恩師白尼が主催する巴雀追善集としては、多分最後のものになるであろうから、義理固い尾藩士のバックアップのもとに、復古革新派の大家として天下に名を成した曉台も、初心「悟一」にかえて三十三回忌の悼句を手向け、旧時の盟友と組したのであろう。四季二句は他の三人の誰か

の句稿中に存した旧作かと思われる。なお上巻には一筆坊は入集するが、曉台の句は見えない。^{三七}

暮雨巷曉台の独立と経営とは、決して夜話亭を離叛することによって遂行されたものでないことは、拙稿「暮雨巷曉台の独立」に詳論するであろう。宝曆末年の『蛙啼集』に至るまで、白尼「曉台師弟間の交情は並々ならぬものが存したのだから、「尾藩人」(京都大雲院)として、生涯を終えた晩年の曉台が、「悟一」号で『百蓮会』に入集することも、必ずしも不可解とはいえないと思う。

なおその後伊藤健氏の報告によると、安永五年白尼歳旦に悟一は入集せず、安永七年の『蓮の露』及び天明二年序・素聞編『花垣集』に悟一が入集する。

『蓮の露』には、

哥仙一順

薰り来る風の便や虚空界

米 布

あの世も嘸な蓮の満開

蓮 阿

笑止さも御伽の酒に管まいて

羽 墨

以下、素聞・爾遷・鑑湖・巴人・李充・悟一・友之・葵成・南畝の十二吟が収録される。書名および右の歌仙によっても明らかのように、安永六年の二十七回忌、或いは同七年の二十八回忌に当り巴雀追善集として編集されたものと考えられる。発句は、次の三句が入集。

わすれ草咲さへおもひ出す日哉

悟 一

夏 秋

日和しる事はわすれて杜宇

悟 一

うか／＼とたはこに酔ふや居待月

同

右の追善句および「夏秋」二句の入集のし方は、『百蓮会』の場合と似ていて、しかもそれほど旧作臭くはないが、やはり安永七年前後の眺台の作風とは異なる。むろん「句巢」や「句集」には収録されない。それでも次のような句は、右の悟一と同一作家の新風の詠法と言えないことはなからう。発想法や語法を異にするだけである。

日頃経て啼日は疎し子規

うつら／＼月見つゝあれは砧うつ

(以上「句巢」)

概して安永の半頃からの眺台には、中興期の新風調もゆるんで、談理や間のびした旧風に近い作品も多くなる。右の悟一の句から考えると、旧作というよりもやはり意識的に悟一時代を回顧して詠んだもののようなうだ。

長の冬よう動たり氷室守

悟 一

の一句は『百蓮会』の竹母連・素聞の編集に成る『花垣集』にみえるもので、全く旧作めいている。刊行年時も近いから、入集の事情も推察に難くないであろう。

悟一は宝暦年間においては、主として白尼編集の諸集にのみ他朗(「子礼翁追善集」と併出したのであり、後の悟一は明和・安永の場合に買夜)と併出したのであり、後の悟一は明和・安永

すれば、宝暦十一年以後、安永七年『蓮の露』に再現するまでの十六年間、白尼歳旦に入集しない謎を解くことが困難だ。しかも安永七年から天明四年にかけて、悟一の入集する二集は、共に白尼編集に成る巴雀追善集に他ならない。この事実は、白尼と格別に深い関係を意味する以外のものであるまい。封建制度下の尾藩士だった眺台が、藩士層を重要な翼下としていた白尼から道義

的にも離反するようなことがあれば、どうして尾藩士層の支持を得て、名古屋城下に新風をひらくことができたであろうか。

注一

「蓬萊下」なる名称は、俗に熱田神宮のあたりを蓬萊島といったのにもとづく。『本朝神社考』『尾張名所図会』等参照。蓬左と同じくここでは名古屋を意味する。早く寛保三年巴雀歳旦に龜六が「蓬萊下」を用いた。

注二

東大・酒竹文庫蔵。序に「戊季春」とあるのみだが、芙蓉楼支朗として入集するから、明和三年と確定。

注三

宝暦十一年五月蓮阿房序、「子礼翁追善集」(写本一冊、中村俊定氏蔵)によると、中村氏子礼は宝暦十一年一月二十四日、古稀をまたずして没した。三州渥美郡の産にして、「閭氏の長臣」であり、呂朝が同家に仕えてその職を継いだ。本集によると、宝暦九年十一月自序、「伊良胡崎」の刊行は十年春。也有・羽墨とは特に関係が深い。

注四

「力草」に「阿か弟子一筆坊鴈沙、久屋に居る。是も余程流行、全体は阿よりも上手なり。」と称され、眺台追善集『落梅花』(寛政四年刊)に、「四十とせの昔は反喬舎に会し、みそちのきのふは夜話亭にあそふ。近くは眺の名の秀て、暮雨に名をとゝむ。ぬしは六十一字、予は古稀となる。さあれ、はや八とせの齡短くして、今や花の散へしとは、いかにおもひけむ。……」と悼句を手向けた逸筆坊こそは、巴龍舎禹麦の後身に外ならない。「四十とせの昔」は、宝暦二年六月の巴雀急逝までを指し、「みそちのきのふ」は、宝暦十三年蛙塚建立による眺台の独立以前を意味する。

彼は初め八鳥麦で延享五年巴雀歳旦、宝暦三年白尼歳旦等に歳暮句が入集するが、特定の組連に属せず、また月次連中ではない。宝暦四年白尼歳旦に八巴龍の歳暮句「入集、同五年歳旦に鳥麦は初めて他朗と共に蓬萊下連中に属し、月次連中の歳暮歌巻行にも一座した。八禹麦V号は宝暦八年白尼歳旦における尾明丘連からである。即ち立机を機会の改号とみなされる。なお『春興朗詠集』に河鳥麦、『続集』に川鳥麦とあるから、「姓伊村又は長谷川氏と云ふ。其子立辰、上下の文字を省き谷と改む。書及俳諧に達す。」(尾張俳人考)という長谷川氏に適合する。『普流寿々理』には、鴈沙息長南里が入集する。

「曉台年譜」が宝暦八年の年齢を禹麦三五歳としたのも、寛政八年七三歳没と矛盾しない。

宝暦九年白尼歳旦には禹麦で年旦の句一入集。年尾の句は時節庵・巴龍舎・不之庵の三人は別格扱い。明和二年白尼歳旦にも巴龍舎で歳暮一句のみ入集。即ち独立後の禹麦はそのような待遇を受けている。

明和元年刊『蛙啼集』に禹麦で、『蟬時雨』に巴龍舎禹麦で入集、明和五年の時節庵八亀春興『店おろし』に珍しく、巴龍舎應左・觀之坊・蓮阿坊と並んで入集、同年秋成『普流寿々理』は巴龍舎鴈沙編に成るから、鴈沙への改号は明和五年と推定される。明和七年『別をり萩』に巴龍舎鴈沙入集、安永二年一筆坊編『芭蕉翁かゝみ塚』に曉台が入集するから、逸筆坊と曉台とはかつての盟友として生涯多少の交渉を絶たなかった。なお『秋錦現世草』（『俳文学考説』四五二頁）に、「六十七齡、一改逸」とある。寛政二年の改号である。

鴈沙の撰著には、他に明和八年・天明五年の歳旦、安永五年「蕉翁句解過去種」（自筆本）、寛政六年「未來種」（同上か）が知られる。

注五

遠き香や猶慕はれて蓮の花
宝暦九年序、八亀編『吾かほとけ』（同十二年刊）上巻の「四季混雑席次任到来」の中に常滑連中に属して入集。

注六

「百蓮会」で改号している作者に辻耕改応物がある。土來・羽墨・一泉・巴人・仙魯・武旦等も入集。

注七

明和二年と安永五年の白尼歳旦に悟一が入集しないことを確かめたが、未見の撰集に次のようなものがある。

明和六年歳旦（綿屋文庫）、安永七年歳旦（尾張俳人考）、天明三年歳旦（綿屋文庫）、同年刊『桂の穂』（藤園堂家藏俳書目録）、天明四年刊『俳諧百時雨』（綿屋文庫）

年次不明のもの、『七夕小短冊』、『たけの春』（二集とも安永か、以上綿屋文庫）、『東しのなかなば』『上巳六題』（以上、尾張俳人考）『後のかつら』（天明頃、藤園堂）
右のうち*を附したものは悟一は入集しない。

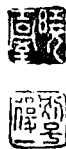
五 「初号後一」印

さて以上のような資料整備よれば、宝暦四年晩春の「求韻短歌行」に一座した悟一と他朗とが、同一人であって不都合ではないであろう。むろん積極的な決め手を欠く不安が残る。恐らく伊藤東吉氏がその晩年に至って、初号悟一を放棄された理由も、諸集に併出する点及び『百蓮会』に悟一が現れる点に存したのではないかと思う。

穿て風體を折き感説十藝一て今
平地一は海を起し其弊を接する
いキ 我々すまうるを以抄抄
漁り春舟以魚をとり次事あれと也

安永三甲午十月

曉臺



叙（板下は一音）抄 来 去

私は最後に決め手を示そう。昭和三十七年秋『去来抄』を点検したところ、安永三甲午十月の去来抄叙の落款には、まぎれもなく、曉初の二印がすえられていることに気づいた。上の白印は、宝暦十三年の蛙啼集序や明和二年の太郎集序に使用されているものと同一印ではない。下の黒印は「後」の小篆がむしろ、「復」に近いが、「復」ではなく、やはり「後一」と判読すべきものだ。伊藤氏の「字後一」説の根拠は他に存するであろうが、

ここでは明白にそれが初号であることを示している。なお管見では、この印を使用した序跋類は、他に例を見出し得ない。「安永四未夏五月」の三歌仙序詞及び「天明七年丁未春」の桃青二十歌仙叙には暮雨巷曉台の署名の下に印形は彫刻されていない。「安永五年春二月」執筆の『さびしをり』(編^{一音})跋には、暮雨巷^{台曉}の二印のみであり、天明五年冬刊『都の冬』(編^仙)序には周^{世三}の二印のみである。真蹟類にも都の冬序のような例は多いかも知れぬが、「初号後一」印を捺したもの、他に多くを見出し得ないであろう。

右の印の判読に私は苦しんだが、架蔵の「曉台選句集」(題^仮)の末尾に、「右例墨暮雨周^後」と款識があるところから、「後一」と読むべき確信を得た。本集の詳細は別の機会にゆずるが、最晩年の寛政期のもとと推察され、この一例からも「名は周^後、字は後一」説は納得できると思う。当然、△後一▽は署名の周^後と深い関連性を持たねばなるまい。

ところで、「初号後一」なる俳人は、寛保から宝暦にわたる木兎・巴雀・白尾関係の俳書に全く発見できないのである。数字のつく俳名は多いが、下に△一▽のつく俳号は、例えば『春興朗詠集』によれば津島の亀一と追加の東一庵以外にはいない。『三秋句合』や夜話亭累年の歳旦にも△悟一▽以外に、下に△一▽字のつく俳人を見出し得ないのだから、当然△悟一▽こそは曉台の初号と考えるべきである。既述のように、悟一と他朗とは所属グループの違いで、整然としていて、矛盾したり混乱したりすることはなかったのだし、また悟一と他朗の作風の点からも少しも支障を認められない。

では、何故去来抄叙のみに「初号後一」印が使用されたのか。「字後一」から由来する初号△悟一▽そのままでは、『去来抄』刊行に当って披露するのは、僭越のそしりをまぬかれぬであろう。弱冠、俳道入門時の心構えとしては、先輩の千箱・亀六・羅三・路十ら夜話亭連中に対応して、「悟一」のひたむきな求道心は大きな意義があったと思われるし、その一途な目標は決して誤らなかつたであろう。安永三年四三歳の曉台は、中興期の第一人者蕪村を相手に堂々と松舞台に進出したのである。その彼が初心忘るべからず、として「初号後一」印に△悟一▽を記念したとしても、誰からも非難されないではないか。

なお臥央編『曉台句集』(文化六年)は、車蓋編『俳發句三傑集』(寛政六年)の誤を正すために刊行したことを、士朗序・臥央跋は共に強調している。しかし曉台自筆の稿本句集が浪華の芹陰舎竹斎に伝わって、名古屋には存在しなかつたらしく、極めて杜撰なものである。「暮雨巷句集」なる写本も天理本以外に最近二本が現われてきたが、それも明和・安永以降の作品が主であり、買夜時代の句は、宝暦十年刊『伊良胡崎』中の一句、明和元年刊『蛙啼集』中の一句等が、僅かに散見するにすぎない。むしろ曉台としては、悟一・他朗時代の未開眼の遺風を抹殺して「句集」に収録しなかつたのは、当然であろう。しかし△他朗▽は門人偕・他郎に譲られて伝えられたのだから、初号もまた生涯の出発点として何らかの記念を残したいのは、人情である。画期的な成長と自信を持ち得た後の曉台が、そのような懐古的な心情から、他ならぬ去来抄叙において△初号悟一▽を披露する気持ちになったと

考えて大過あるまい。

悟一の作品は、五条坊・反喬舎・夜話亭の撰集を調査することにより、なお若干を追加することが可能であろう。そのような集成は彼の文芸に質的なプラスはほとんどないかにみえるが、晩年の晩台の墮落時代を考察する上に不可欠の資料と思われる。のみならず、菊兎への入門が宝暦元年を大中に遡ることににより、「獅子門を見破りて俳諧復古」といふ事を唱て、終に正風を天下に伝ふ。^(力)端緒を得るまでには、並々ならぬ修業的時間を要したことが正當に理解されるのである。しかも俳壇復古の一転機をなした芭蕉五十回忌の頃に、尾張俳壇の人となったことは、極めて意義深いこととしなければならぬ。寛保三年十二歳の少年悟一は、多分その前年あたりに菊兎に入門し、傍ら反喬舎や五条坊の教導をも受けたのであろう。たとい当初巴雀に入門したとしても、巴雀は息子の菊兎に直接の指導をゆだねたに相違あるまい。夜話亭連中において一人きわ立った年少俳人は、最初から数少い白尼直門であった、と私は考える。後年江戸で脱藩して専門俳人としての道を選んだ買夜が、宝暦十年の『伊良胡崎』や同十二年の『橋立みやけ』に至って感覚的新風の曙光を見出すまで、実に十七八年の長い歳月を要したのであり、それは他の中興期作家達の歩みとも時代的にはば合致する時間であった。

宝暦期に入って拓路十或いは尾曾文を中心とする竹母会に属した悟一は、一方ではより発展性を持つ去角中心の鳥州舎連中の一員として他朗を号し、それはやがて望日連→蓬葉下連→尾明丘連と展開して、気鋭の若武者として一門に重んじられたのである。その間、悟一は他朗が日夜親しく接触して、教導と刺戟を受けた

のは、巴雀―白尼二代門下の先輩グループであり、それは当然藩士層を中心とした可能性が強い。也有が階級や身分の上下を問わず風交したのとは、おのずから条件を異にするであろう。

その也有にしても、祖父に当る季吟門野双に十五歳で死別しており、みづから「少年の頃より俳諧を好み」^(鶉衣「与青路辞」)と言ったことからすれば、祖父の教導は更に数年を遡るはずである。白尼もまた享保九年十六歳で五条坊歳旦『松のあさひ』に入集した。精査すれば、これまた数年を遡り得るであろう。秀才晩台が十一―十二歳で俳道に入ったとしても、年齢に不足はあるまい。さればこそ、北海坊仙仙は天明三年の『風羅念仏』において「一日の懈怠は百日の懈怠……叟総角の頃よりしも此道の一癖に遊びて、蕉翁の正徳を一日口に唱ふ歟、心にあまんせぬ日とはなし。…」と、「尾陽の晩台うし」を讃頌したのであった。総角の頃はむろん元服以前の少年時代を指すであろう。

なお、宝暦六年度の夜話亭『丙子歳旦』に、

三 朝 新らしき縁家を祝して

門ひとつ設けて嬉し松かさり 尾一之宮中 雅

梅の匂ひを添るあら壁 蓮 阿

春もまたかるた遊びの跡引て 他 朗

が掲げられ、蓬葉下連の短歌行^(土来)にも、蓮阿・鳥麦・有耕・

去角・松羽・子礼について、

白河越える梅に日黒み 朔 吾

忘れては差たむかしの腰を撫 一ノ宮中 雅

二言といわす帰る懸乞 他 朗

挑灯も朧に花の夕間くれ 十 紅

結納^{シムシ}も尾ひれある桜鯛

仙 魯

とあり、また二の裏は朗・雅・魯・紅で終る。尾張一宮の中雅なる人物は、その付句がみずからの境遇を語っているものとすれば、やはり退隱藩士であった。蓬萊下連の顔ぶれは、ほとんどが藩士であり、『春興朗詠集』や宝暦五年白尼歳旦に三之丸連中として出る波梅裡は、宝暦八年歳旦に、「つらく世の風情をはかりて、所全侍官の交りも逃……贅の油を矢矧川にあらひ、まづ是非庵に春をむかへて三十七年の闇も晴れ、……」と述懐している。「三十七年の闇」は下級藩士の氣持を端的に代弁するものである。柳礎軒梅裡は三州寺部に退隱するが、そこはトップクラスの重臣渡辺半藏家の知行所であった。渡辺家の陪臣であろうか。也有も病弱の故を以て早くから致仕を願ひ出たが、許されたのは宝暦四年五三歳の時である。

一宮の中雅は、延享四年巴雀歳旦の一之宮連中五人のうちに入集せず、同五年巴雀歳旦には、一之宮連中の最初に「あら玉の光りや娘の着衣始^{春軒} 中雅」他一句がみえる。白尼歳旦では、宝暦五年度に入集せず、僅かに『春興朗詠集』末尾の追加に二句入集するのみ。白尼八四歳没説^{伊藤東吉氏}に従えば、宝暦五年四七歳であり、紙屋七兵衛^{雀巴}の嗣子と中雅とが「新らしき縁家」となる可能性は極めて少い。従って右の歳暮短歌行には、宝暦五年二四歳の他朗の結婚祝賀の意が寓されていると思うのは、私の僻見であろうか。二か所とも中雅と他朗とは密接しており、特別の関係を推測せしむるに足る。そうして翌五年三朝のうちに、中雅は、荒壁の新居に新婚の他朗夫妻を訪問したのではないか。その間に白尼が介在しているらしく、白尼―他朗の師弟関係は、単に

俳諧の上のみではなく、世道の上においても極めて深いものが存した証拠とも考えられよう。

注一 安永四年刊『熱田三歌僊』の藤園堂本には朱印が直接押捺されており、普通の板本には印刻はない。

注二 大阪女子大学の山崎文庫本について、大谷篤藏教授の指教を得た。

注三 「眺台年譜」によると、安永五年春「世継集」の序詞（刊本の有無不明、稿本による）、同年冬関親卿著「香道真伝」の漢文跋も存するが、印記の有無等不明。後者には「張藩久眺台」と署名してあるという。「世継集小序」は「眺台句集」に収録。

注四 大魯三十三回忌「霜月十三日」（文化七年刊）巻末広告に次のようにある。

浪速芦陰舎竹齋著

眺台発句集 近刻出来

暮雨巷 自筆
闌更序

「暮雨巷句集」は大磯義雄氏の好意により、三河某氏所蔵本による。

注五 延享二年、尾陽美濃派の長老楚巾も領地に退隱した。

ことし領地に立寄りて老の心もいさましく
二度のかけ具足の餅を搗世哉

楚巾（巴雀歳旦）

〔附記〕

本稿を故伊藤為之助・東吉御兄弟の靈に捧ぐ。また資料閲覧に当って中村俊定・大磯義雄・大谷篤藏・木村三四吾・島居清・伊藤健諸氏の御厚情に浴した。記して謝意を表する。（38・3・28初稿、39・11・22成稿）

〔再附記〕

なほ明和五年秋序跋「普流寿々理」（巴竜舎鷗沙編）の下巻に、悟一、眺台の発句各一が併出し、百韻には梅莊下連悟一が参加している。詳しくは後考。

（高知女子大学 文学部 国文学研究室）